

◇昨年度は70周年という節目の年でもあり、あらためてこれまでの志四中を知り生徒にも式典にかかわらせながら今後の志四中の方向性を確認できた年でした。

さて、8年度の体制も整いましたが、本校の大きな課題は「若手が若手を育てる」ということです。経験が浅く未熟と思われたりしてしまうことがあったり、頑張りが成果と見合わないこともあると思うが、それぞれの立場を自分自身で理解しながら周囲への理解を意識して謙虚にふるまうことが必要です。また、他の成功や成長を喜べる精神的余裕がほしい。今後、互いに支えあって成立していることを意識できるようにならなくてはならない。

様々な取り組みを進めながら互いに支えあい、感謝の気持ちをもって良い関係を構築してほしい。

## 1 学校経営方針作成にあたって

- 今の変化の激しい社会の中で、生徒が人生を豊かに送ることができるよう、知識・技能を身に付け、心豊かに、また、体力を向上するとともに、様々な体験を通して社会を生き抜く力を身に付け、自ら未来を切り拓くことができるようにすることが学校の使命である。生徒の生命を守り、教育環境を整備することにより、生徒が安心して学校生活を送れるよう、全教職員一丸となって教育活動を行う。
- 生徒が希望する進路の実現を目指す。志村第四中学校の3年間だけでなく9年間の学びの連続により、大きな充足感を抱き、義務教育を修了するよう、就学前から中学校卒業までを見通して指導する。また、教職員一人一人が、各特性及び専門性を十分に生かして教育活動を展開し、学びの質を向上させる。

## 2 学校の教育目標

### (1) 基本的な考え

- ①本校卒業後の生き方を見据え、「共生」と「社会貢献」を生徒育成指導の中心に位置付ける。
- ②生徒が在籍する3年間だけでなく義務教育9年間に自立の基礎となる学習や生活習慣を身に付ける。加え、卒業後に社会（進路先や地域社会）へ参画する態度の基礎を培う。
- ③学習・生活指導により、義務教育修了後、進学先やその後の社会生活において継続し、生活する力を身に付けさせる。また、生徒の第一志望の進路先実現を支援する。教員はもとより、生徒、家庭が共にその実現に向けた環境整備をする。
- ④教員の授業改善及び補充学習により、全生徒に基礎的・基本的学習内容を定着させるとともに、学習意欲を引き出し、学び続ける態度を養う。生活指導については、行為と背景を分け、厳しくも温かな指導を継続的に実施する。
- ⑤特別活動（学校行事・学年行事を含む）において、集団における協力・助け合い、共に鍛えあう心を育むとともに、取組への参加意欲を高めるよう指導する。生徒の活動を主体とし、可能な限り教員主導の場면을抑制する。
- ⑥人権尊重の精神を、全教育活動を通じて適正に指導する。
- ⑦地域の教育力を積極的に活用するとともに、地域社会への生徒の貢献を促す取組を推進する。
- ⑧CS委員会から学校経営の基本方針等について意見を得、地域と共にある学校を実現する。

### (2) 教育目標

学び合い、鍛え合い、高め合うことを通じて、多様な意見や価値観を認められる、グローバル社会で活躍できる人材を育成する。

人権尊重の精神を基調として、心身共に健康で、知性と感性に富み、生涯を通じて主体的に学び続け、国際社会に貢献できる人間性豊かな生徒の基本的資質の基礎を培う。

- よく考え進んで学ぶ生徒
- 心豊かで思いやりのある生徒
- ねばり強くたくましい生徒

### (3) 目指す学校像

- 9年間の学びの連続性を大切にする学校
- 確かな学力を身に付ける学校
- 自ら課題解決を図る生徒を育てる学校
- 生徒が主体的な活動に取り組む学校
- 防災拠点等地域の核となる学校

### (4) 目指す生徒像

- 自ら考え、判断し、行動する生徒
- 学習規律を確立し、学ぶ姿勢と意欲をもった生徒

### (5) 目指す教師像

- 人権尊重の理念を認識し、職務遂行する教師
- 生徒の良さを引き出せる教師
- 真摯に研究・修養に励み、学び続ける教師
- 組織の一員として学校運営に参画する教師

## 3 中期的経営目標と方策

### (1) よく考え自ら進んで意欲的に学ぶ生徒を育成する

- ①授業において主体的な学習活動を充実させ、生徒の学習意欲を高め、家庭での自学自習を指導する。
- ②生徒のタブレットを中心に、興味・関心を高める教材・教具を活用し、個性の発見と伸長を図る。
- ③補習（放課後、長期休業日等）を充実させることで、定着が不十分な生徒や学習進度の遅れがちな生徒の対応を図る。
- ④基礎的・基本的学習内容を定着させるため、授業規律を徹底させ、落ち着いて授業を受ける環境を整え、よくわかる楽しい授業を展開する。
- ⑤生徒が目標を持ち、自己の達成感や成就感が得られるよう英検・漢検等検定試験を受ける機会をつくる。

### (2) 他者の考えや価値を認め、心豊かで思いやりがあり協力し合い助け合う生徒を育成する

- ①行事や諸活動を計画的に実施し、生徒が人間性豊かに触れ合う機会を設け、奉仕する心と連帯意識を育成し、他人を思いやる心を育てる。
- ②教育活動全体を通し、豊かな心と人権尊重の精神を育成し、通常の学級と特別支援学級等との交流や特別支援教育を推進する。
- ③学校や地域社会に愛着と誇りをもてる文化的・体育的活動、ボランティア活動等を促進する。

### (3) 進んで心身の健康に努め、正義感や規範意識をもつねばり強くたくましい生徒を育成する

- ①食育を通し、心と身体の健康、環境に関心をもち、心身ともに健全でたくましく生きる生徒を育てる。
- ②安全な行動や規律ある集団活動を通し、健康・安全について基本的な態度を育成し、特に防災意識の向上を図り、自ら判断し災害時に正しい判断のできる能力を育成する。
- ③生活のきまりやルール等教員相互の共通理解を図り、学校全体で一貫性のある組織的な指導の徹底を図る。（挨拶、時間遵守、清掃等）

## 4 今年度の重点目標等

### (1) 学力向上・授業改善

板橋区授業スタンダードをもとに「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す。基礎・基本の徹

底と思考力・判断力・表現力の育成のバランスをとっていくのが課題である。具体的授業改善については、定期考査の結果、到達度テスト等標準化されたテストの結果、生徒授業アンケートの結果等を個々に分析して自分の授業改善に反映させる。そして、これらの実践を踏まえながら学びのエリア研修をもとに小学校との学びの連続性を意識しながらスタンダードに磨きをかけていく。また、適正な評価についても課題がある。教科の特性もあり単純には割り切れないが何をどう頑張ればよいかわかりやすい評価を心掛けてほしい。さらに、夏休みにも研修が予定されているが、教科センター方式等を活用した主体的に学習に取り組む基盤研究も一貫校としてスタートする前に助走をつけておかななくてはならない。

## (2) 不登校等生徒への対応

本校には、様々な背景や原因が積み重なり不登校や不登校気味になっている生徒が50名余在籍している。不登校の始まりの多くは小学生の時にさかのぼる。家庭環境や本人の特性によるところが大きいが、二次的な要因として友人関係の構築が難しかったり、学習についていけない体験を積み重ねて学校に登校すること自体苦痛になっている。複合的な原因を一つ一つ取り除いていくには、担任や学年の力だけでなく家庭の理解と協力が不可欠である。学びのエリアの小学校との具体的な情報交換やその方法・回数等の体制を作りながらできるだけ早期に対応できるようにしていく。また、保護者の理解を得るためにもSCやSSWの活用や外部機関や専門家のアドバイスが必要である。今年度はSCは火・木・金の3回、SSWは常駐となる。適切な活用をすすめていく。さらに、すぐに成果を求めるのではなく少なくとも卒業までをひとつの期間と考えたり、継続的な指導の機会を確保するため卒業後、どこにつなげていくか見通しをもって対応する必要がある。学校では特別支援委員会(校内委員会)を中心としてできることを少しずつ実践していく。それでも、10%の生徒が不登校であるという現実を改善していきたい。新たな居場所づくりが定着し、週2~3回の別室登校にも対応できるようになったのを機に、様々なケースに対応できる体制をつくり改善のチャンスを広げていく。生徒のニーズに従って心理的安全性を確保できるスペースとして運用するだけでなく、不登校の二次的な原因である教室に戻っても授業がわからない、ついていけないという理由に対応して、学力向上専門員を積極的に活用して対応していきたい。

## (3) 生徒・保護者対応

基本は「傾聴」である。相談がうまく前に進まなかったりするパターンを見ていると、まずは要望等を十分お聞きできていないことが多い。すべてのパターンに対応できないかもしれないが、十分趣旨を把握したうえでできること、できないことを明示していくことが必要な生徒や保護者が多い。特に保護者の場合でそのようなことが多いので聞きながら即答できることは対応し、無理な場合は相談する時間をもらったほうが良い。さらに指導が一過性のもにならないよう見通しをもって対応したり、見通し等を生徒や保護者と共有することが大切である。学年や分掌、学校という単位で担任一人に任せてしまわない体制も構築しなければならない。

## (4) 若手を中心とした人材育成

管理職との方向性の確認をしながらそれぞれの学年が目標を明確に意識しながら活動を創出できるようにする。担当が意欲的に取り組めるのは成果を実感できたり発想を実現することのやりがいを味わう経験が必要である。成功体験なしでは前に進むことができない。多少うまくいかなくても生徒のためにあるべき姿を積み重ねてほしい。

本校には若手が多く、若手から学ぶことも多いが様々な活動の目標や活動内容、準備から当日、事後指導まで、また、日常の生徒への接し方や保護者との連絡や報告、お願い等多岐にわたる課題が目の前にあり、手探りで事に当たることの無いよう支援が必要である。常にいっしょに取り組む中で体得してもらったり感じてもらうたりし、人材育成の意識を互いにもって高め合ってほしい。そのため、学年内や分掌内での連絡や検討・提案のラインをしっかりと意識してほしい。分掌内での提案・検討から始まり運営委員会での検討・確認、職員会議での周知と流れていくとよい。その分学年主任や分掌主任の指示等が大切になる。また、校内研修を月1回程度テーマを設けて情報交換、意見交換する場面を水曜日に設定したい。

## (5) 働き方改革

以前に比べてメリハリをつけて勤務している傾向がみられてきている。在校時間シートの記録も時期によっては残業を余儀なくされるケースもあるが、改善している。また、これまで、1・2学期の通知表の所見の廃止、定期考査のA1採点の導入、アンケート等の電子化、1学期の中間考査の廃止、留守番電話の導入や会議のスリム化等を実施してきた。また、職員会議のペーパーレス化や水曜日の部活動を中止することで放課後の会議時間や委員会指導時間、その他の校務を時間内で切り上げられるようにしている。しかし、何よりも職員の健康維持と時間内にやるべき仕事をこなす意識の定着が求められる。

働き方改革に大きく関係してくる活動として部活動がある。

部活動は教育課程外の自主的な活動として、生徒がスポーツ・文化・芸術活動を通じて、学年を超えた仲間と共通の目標（技術の向上、大会入賞など）に向かって切磋琢磨する場である。人間関係の大切さ、主体性、協調性、責任感、克己心を養い、心身の成長と豊かな学校生活を創造することを目的にしている。

意義は理解していても自分がどこまで携われるか、地域展開していく途上であることを踏まえ葛藤するところである。

部活動の入部状況を見てみると、運動部ではバスケやバレーなどの集団競技より陸上・ソフトテニス・バドミントンなどの個人競技に偏っていたり、華道・美術・PC・演劇等に入部する生徒が多い傾向にある。なかには一応部活動に入部しておいて入試において有利な条件を期待する戦略的な考え方や先輩からそのような考え方を伝えられている場合もあるようである。そのようなことはないことをあらためて生徒に確認しながら本来の目的に沿った部活の存続ができるとうい。また、令和11年の冬まで校庭がないことを考えると縮小傾向もやむなしである。8～10年度の募集についてはこれまでの活動にとらわれずに具体的な条件（活動日数、時間帯、大会参加の有無等）を確認して入部するよう話していかなくてはならない。今できるのは家庭科部やボランティア部等の文化部の受け皿を増やすことである。

いずれにしても今後の志村四中の部活動について生活指導部でも話題にしながら検討し、バランス感覚をもとに改善していきたい。

## 5 その他の取り組み

### (1) 自主・自律の精神の育成

本校生徒の自主・自立の精神の育成は日常生活だけでなく、学校行事を通して醸成されていく傾向が強い。部活動も重要な教育活動のひとつである。自主・自律の本質を意識し、規範意識を高めるとともに社会性・基本的な生活習慣を身に付け、学校行事や部活動と学習の両立を図る。

### (2) 豊かな人間性の育成

生徒の活動範囲も広がり、様々な人とふれあう機会を創出する可能性が強くなっていく。地域の一員として活躍する場をもち、かわりを大切に他を思いやり豊かな感性やコミュニケーション能力、表現力を育てる。

### (3) 学校地域教育の基盤の確立

コミュニティ・スクール委員会を活用し、絆を深める地域教育基盤の確立に努め、情操や感性を豊かにし、板橋区コミュニティ・スクールとしての機能化を図る。

### (4) キャリア教育の充実

日常生活の中でボランティア体験や奉仕活動、地域から学ぶ学習を通して、望ましい職業観・勤労観を身に付け、将来の自分のあり方や生き方を見出させる。

### (5) 学校経営支援部の活性化

「チーム四中」の確立のため、主体的な学びを深める学習環境や人材を整備し、校務分掌の組織体として校務改善に努め、機能的な学校経営支援組織を活用する。今年度は、校内環境整備や学校行事等の支援に携わらせていく。

### (6) 情報の発信・受信

今後もHPの定期的な更新等ICT委員会を中心に協力して学校の「今」を伝えていけるようにする。